

4-1-5 第一専門診療部

4-1-5-1 消化器科

1. 概要

診療体制は医長、医員、レジデントの3名に、内視鏡科の林篤先生の応援を得て、肝、消化管疾患を中心として、ほぼ順調に経過したと総括しうる。

2. 診療活動

1 消化器疾患は炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病）を主体としてその診断と治療をおこなっている。炎症性腸疾患は年間10名程度の増加で、最先端の治療として、白血球除去療法、抗炎症、免疫調整療法などを積極的におこなってきた。乳児期の炎症性腸疾患と難治性下痢症との関連、小児におけるステロイドなしの治療方法の確立などについて検討している。

近年問題となっている心の問題と消化器疾患について検討し、食事の精神に及ぼす影響について症例を通じて明らかにしてきた。過敏性腸症候群は精神的影響のつよい疾患はもとより嘔吐症や便秘症、発達障害を含め、広く家族全体のあり方まで含めて、こころの診療部との協力をもとに治療方法を検討している。

2 肝胆道疾患およびその周辺の免疫病に関する疾患の診断と治療

肝臓病疾患は胆道閉鎖症、アラジール症候群、その他に胆汁うっ滞性疾患、代謝性肝疾患、ルポイド肝炎など幅広く扱っている。肝胆道疾患は患者数が非常に多く、成人例についても診断、治療をおこなっている。その線維化の機序については、基礎的研究を含め、研究を深めて臨床に役立てたいと考えている。

3 C型肝炎についてはリバビリンの併用療法、PEGインターフェロンの効果について、検討を進めている。小児においては単独療法は成人に比し著効率が高いが、再燃例に対する併用療法は十分な効果が認められず、PEGインターフェロンのほうが最終的には良好な結果が得られると考えている。

4 Wilson病をはじめとする代謝性疾患では、硫酸亜鉛、酢酸亜鉛をはじめ、種々の治療方法をおこない、良好な結果を得ている。

5 腎不全患者については、CAPD療法を施行し、その腸間膜での代謝について検討している。検討により、3DGをはじめとする糖分解産物が蛋白凝集の作用を介して腹膜効果の原因となっていることを明らかにしてきたので、腹膜硬化症の意味からも中性透析液を使用することによって良好な結果を得ている。腎保護作用としてのCAPD療法も見直されていることより、多尿期にある患者についてはイコデキストリンの透析方法を活用してCAPDをおこなうことによって患者の生活の質の向上をはかるとともに、生理的变化について臨床的な検討をおこなっている。

6 在宅栄養療法

経腸栄養、在宅中心静脈栄養についても積極的に取り組み、成長、発育に及ぼす影響、セレンなどの微量元素の補充療法について検討してきた。

以上、活動は多岐にわたっているが、患者さんの必要に応じて医療を広げるというスタンスでおこ

なってきた。基礎研究も、受託研究として肝臓の線維化の問題を取り上げ、また JAG1 遺伝子との関連で研究を進めている。